

カリキュラム・リーダーシップと教師の力量形成

—イングリッシュ Fenwick W. English のカリキュラム経営論を中心にして—

中野和光

(2004年9月24日受理)

Curriculum Leadership and Teacher Development
—Centering upon Fenwick W. English's Treatises on Curriculum Management—

Kazumitsu Nakano

This paper examined the nature of curriculum leadership based on Fenwick W. English's treatises on curriculum management. English studies educational administration as an interpretive human science and not as a positive science. Interpretation and understanding of human affair is important in human science. And criticism is made much of, too. From this standpoint, he approaches to curriculum management emphasizing the importance of quality management and deep alignment.

We need understanding of children and criticism of society in curriculum research. But, curriculum must be planed based on understanding of children and criticism of society. In this meaning, curriculum leadership is 'an educational tact' in the responsibility for the future of children and society. Teacher is a partner in curriculum management. He is required of this 'educational tact', too.

Key words : Curriculum Leadership, Curriculum Management, Educational Tact, Teacher Development
キーワード：カリキュラム・リーダーシップ, カリキュラム経営, 教育的タクト, 教師の力量形成

1 はじめに

カリキュラム研究の世界においては、タイラー原理を中心とする伝統的なカリキュラム構成の研究者たちとタイラー原理を批判するカリキュラムの再概念主義者、ポストモダニストの対立がよく知られている。米国の教育経営学（教育行政学）の文献を読むと、科学的教育行政学対解釈学的教育行政学・ポストモダン教育行政学として同様な論争が行われていることに気づかれる。

本稿においては、この中の、ポストモダン教育行政学の立場のイングリッシュ (Fenwick W. English) のカリキュラム経営論¹⁾を中心に、カリキュラムへの経営学的アプローチの意味、カリキュラムの国家基準の時代におけるカリキュラム・リーダーシップ研究、そして、教師の力量形成の問題について考察してみた。

2 科学的教育行政学対解釈学的教育行政学の対立

最初に、教育経営学（行政学）の研究者には周知のことであるが、科学的教育行政学対解釈学的教育行政学の対立とはどのようなものであるか簡単に説明しておきたい²⁾。

カルバートソン (Jack A. Culbertson) によれば、最初の教育行政学の書物は、1875年に出版されたペイン (William H. Payne) の書物である。それ以後の、社会科学の発展を、カルバートソンは、次のようにとらえている³⁾。

- 1875-1900年 素人による社会科学
- 1901-1925年 社会科学が提案される
- 1926-1950年 社会心理学, 社会学, 人類学, 政治学の概念が用いられる
- 1951-1966年 教育行政や教育組織の研究に社会科学の教授が指導的役割を果たした

1967-1984年 改革者たちは実証主義的社会科学を拒否し、「批判的」「解釈的」社会科学を受け入れた。

この整理において、実証主義的な社会科学としての教育行政学の代表者がグリフィス (Daniel E. Griffiths) である。

1975年、グリーンフィールド (Thomas Greenfield) は、量的なデータに基づくこのような科学的教育行政学を、行き止まりの高速道路を走っているようなものだと批判した。

グリーンフィールドは、科学的教育行政学と解釈学的教育行政学の哲学的前提の違いを表1のように整理している⁴⁾。

表1 社会的現実とは何か

比較の次元	自然システム	人間の発明
哲学的基礎	実在論：世界は存在する。そして、あるがままに認識される。組織はそれ自身の生命を持って実在する。	主観主義：世界は存在する。しかし、異なった人によって異なって構築されている。組織は、発明された社会的現実である。
社会科学の役割	社会と人間の行為の普遍的法則を発見することである。	異なった人々はいかに世界を異なって解釈しているかを発見することである。
社会的現実の基本的単位	集団性：社会もしくは組織	単独あるいは共に行動する個人
理解の方法	集団性の存在を許容する条件あるいは関係を確認する。それらの条件や関係を概念化する。	個人が彼らの行為に課している主観的意味の解釈。このような行為に対する主観的規則の発見。
理論	人間の行動を説明する科学者によって立てられた合理的体系	人々が世界と行為を意味づけるために用いる意味のセット
研究	理論の実験的あるいは準実験的検証	意味のある関係の探究と行為へのそれらの影響の発見
方法論	現実の抽象化、とりわけ、数学的モデルや量的分析による	比較のための現実の表現。言語と意味の分析
社会	秩序付けられている。統一的な価値体系によって管理されている。	葛藤している。権力に近い人々の価値観によって管理されている。
組織	目標を志向している。人々から独立して。社会における秩序の道具は社会と個人の両方に奉仕している。	人々と目標に依存している。ある人々が管理し、彼らにとってよいと思われる目的に向かって使用できる権力の道具。
組織の病理学	社会的価値や個人的欲求について調子がよくない	多様な人間の目的を追求する人々の間には絶えず葛藤がある
組織の悪を治癒する処方箋	社会的価値と個人的欲求に応えるために組織の構造を変革する	組織の行動の中にはいかなる価値観があり、それは誰の価値観かを発見する。もし、可能なら、人々もしくは彼らの価値観を変革する。

イングリッシュは、解釈学的教育行政学の立場に負担する。

イングリッシュの教育行政学に関する見解は、次の書物によって知ることができる。

Fenwick W. English, Educational Administration -The Human Science, Harper Collins, 1992.

Fenwick W. English, Theory in Educational Administration, Harper Collins, 1994.

Fenwick W. English, The Postmodern Challenge to The Theory and Practice of Educational Admin-

istration, Charles C. Thomas, 2003.

イングリッシュの『教育行政学=人間科学』によれば、伝統的な教育行政学は、行動主義と構造主義に基づいている。自分の教育行政学は出発点ではそれらを含むが、それを乗り越える。グリーンフィールドがその動機を作った。伝記とナラティブを重視するグリーンフィールドの立場はディルタイの立場に類似している。「人間科学」という副題は、ディルタイの人間学からとった概念である⁵⁾。このように、イングリッシュは述べて、自分の教育行政学の立場をグリーン

フィールドと同じ解釈学の立場であるとしている。

イングリッシュによれば、グリフィスは、自然科学に基づいて、実証主義的に、教育行政学を構築しようとしている。事実を集め、説明しようとする。しかし、それは、不可能である。観察それ自体が選択的である。人間の行動は、文脈と意味によって理解される。解釈学は、事件を調べ、文脈と意味を調べ、もつともありそうなシナリオを作る。そのシナリオは理論と言ってもよい⁶⁾。

『教育行政の理論』は解釈の問題をディスコース論と結合させている。人間は、文化の中で、日常言語によって形成されるディスコースの枠組みの中で、知覚する。科学的教育行政学といわれるものは、特定のディスコース—行動主義—に基づいて物事を見る見方である。その文化の中の人々はそれを自然と感じる。そして、権力関係を隠す。この隠された権力関係は「脱構築」されなければならない⁷⁾。イングリッシュの教育行政の理論追究は、このように、ディスコース論を通して、批判理論や、ポスト構造主義と結びつく。イングリッシュによれば、旧い行政科学は死んでいる。新しい行政科学が取って代わらなければならない。新しい行政科学の方法は人間性を中心においた批判的反省的アプローチである⁸⁾。

『教育行政の理論と実践へのポストモダンの挑戦』は、科学的教育行政学をさらに急進的に批判している。それによれば、ポストモダニズムの最大の敵は、「確実さ」である。「学校改善モデル」といった真理追求の方法で標準化されるやり方は、政治的役割によってのみ支持しうるヘゲモニー的实践である。ポストモダニズムは、「正しい」ということは文脈によってのみ決定されるとする⁹⁾。このように述べて、科学として教育行政学の知識基盤があるという見解は、それ以外のものは非科学的とみなし、科学としての特権的立場を守ろうとするものであるとし、「近代」を次のように批判している。

- (1) 「近代」は唯一の現実があるという。しかし、現実には、構築されたものである。科学は、言語ゲームであり、言語に依存する。現実は多元的な見方がある。
- (2) 「近代」は知るものと知られるものを分ける。分けることによって「客観性」が可能になるとする。このようなことは、現象の観察者が観察過程において不可欠であると信じられていないから可能になる。しかし、観察という行為は観察者が不可欠である。全ての観察は、日常的価値観を持った倫理的行為である。
- (3) 「近代」は、現実を検証しようとする。しかし、

理論から自由な観察は無い。全ての観察は理論を持っている。権力の真の言語は理論である。理論は既存の権力関係（ヘゲモニー）の強化である。

- (4) 「近代」は、真理は発見され、文脈から自由であるとする。そうではなく、真理は文脈の中で構築される。
- (5) 「近代」は、科学は、理性的で、自己修正的であるとする。そうではなく、科学は偏見を伴った人間的活動である。
- (6) 「近代」は、科学は究極の審判であるとする。そうではなく、科学は、常に、ひとつの伝統自身に過ぎない。究極の審判ではありえない¹⁰⁾。

このように、イングリッシュは徹底的に「近代」を批判し、近代的教育行政学を批判し、アメリカの学校は過剰に管理され、本当の意味では導かれていない、展望を技術で置き換え、道徳的目的と英雄主義を行動分類学と「ベストプラクティス」で置き換えた、と批判する¹¹⁾。

イングリッシュは、確かな知識基盤を持った学問としての科学的教育行政学を拒否し、解釈学的教育行政学に同情的なドンモイヤー (Robert Donmoyer) が差し伸べた教育行政学という「大きなテント¹²⁾」の中に入ることも拒んでいる¹³⁾。

3 イングリッシュのカリキュラム経営論

それでは、このような立場に立つイングリッシュのカリキュラム経営論はどのようなものだろうか。

イングリッシュのカリキュラム経営論は、次の文献で知ることができる。

- Fenwick W.English and Roger A.Kaufman, Needs Assessment, ASCD, 1975.
- Fenwick W.English, Quality Control in Curriculum Development, The American Association of School Administrators, 1978.
- Fenwick W.English ed., Fundamental Curriculum Decisions, ASCD, 1983.
- Fenwick W.English, Curriculum Management for Schools, Colleges,Business, Charles C.Thomas, 1987.
- Fenwick W.English, Curriculum Auditing, Technomic Pub., 1988
- Fenwick W.English, Deciding What to Teach and Test, Corwin Press, 1992.
- Fenwick W.English, Total Quality Education, Corwin

Press, 1994.

Fenwick W.English et al ed., Curriculum Management Audit, Technomic Pub., 1995.

Fenwick W.English with Betty E.Steffy, Curriculum and Assessment for World Class School, The Scarecrow Press, 2001.

Fenwick W.English with Betty E, Steffy, Deep Curriculum Alignment, The Scarecrow Press, 2001.

(1) カリキュラム経営論

最初に、1987年の『カリキュラム経営』にもとづいて、イングリッシュのカリキュラム経営論を説明してみよう。

イングリッシュによれば、カリキュラムとは教師のために計画された仕事の計画であり、カリキュラム経営とは、カリキュラム開発 (development) とカリキュラムの運用 (delivery) を包摂した概念である¹⁴⁾。伝統的なカリキュラム開発が、後者を検討してこなかった理由をイングリッシュは、次のように説明している。

伝統的なカリキュラム開発の概念は通常、内容の選択、配列、評価を含んでいる。しかし、フィードバックとしての授業との結合、監査 (auditing)、管理 (administration) は検討してこなかった。それらはあまりにも自明のこととされたのである。

伝統的なカリキュラム開発がカリキュラムの運用を検討して来なかったのは、ちょうど、チャレンジャー事故のとき、ロケットのデザインの改善にのみ集中して、打ち上げ手続きを無視したようなものである。それは、品質管理の失敗である¹⁵⁾。

イングリッシュのカリキュラム経営論の特色は、カリキュラムのこの品質管理を強調することである。イングリッシュのカリキュラムの品質管理論を検討してみよう。

(2) カリキュラムの品質管理のための監査 (1979年)

イングリッシュは、『カリキュラムの品質管理』(1978年)において、カリキュラムの品質管理は、決して、教師の労働と正反対のものではなく、教師をカリキュラム開発の過程における統合的なパートナーとするものであるとして、カリキュラムの地図 (curriculum map) という手法で、教室の実践を観察する方法を提案している¹⁶⁾。

1979年、オハイオ州コロンバスの公立学校を対象にして、イングリッシュは、「カリキュラムの監査」を行なっている。その理念は、学校のプログラムは、その効果を独立に検討されるべきである。その結果は

報告されるべきであるというものである¹⁷⁾。

『カリキュラム監査』(1988年)によれば、監査基準は次のようなものである¹⁸⁾。

- 1 資源、プログラム、人事
- 2 明確な確かな目標
- 3 プログラムがどのように開発され、実施されているかを説明する文書
- 4 そのプログラムの校区へのフィードバックの諸結果の校区による利用

監査は、文書、インタビュー、実地見学、等によって行われる。

(3) 全体的品質管理 (Total Quality Management)

品質管理のためのカリキュラムの監査の必要を説くイングリッシュに大きな影響を与えたのは、デミングの品質管理論である。

デミングは、『新しい経済学』(1993)において、人の等級付け、能力主義、成績給に反対し、利己的な競争ではなく、協力の方法による変革 (transformation) を説いている。デミングによれば、改善には深い知識が必要である。経営とは、深い知識にもとづく予測である。経営のリーダーシップは、予測にもとづいて、知識、パーソナリティ、説得力を持って、組織の変革を行うことである¹⁹⁾。イングリッシュは、デミングのこの考えに共鳴して、学校を学習の場へと変革する方向を示している²⁰⁾。学校はそこでは、機関ではなく、学習の場であり、カリキュラムはそこでは、演技場計画 (arena planning) とされる²¹⁾。演技場計画としてのカリキュラムの特徴は次のようなものである。

- 1 世界は無秩序で、非決定論的である。
- 2 計画の中の不可欠の要素は、教師ではなく、学習者によって管理される。
- 3 全ての学習者が不可欠なものとする共通知識を定義する圧力が無い。
- 4 高度の思考技能は、学習者の願望と結合している。
- 5 活動と経験が強調される²²⁾

(4) カリキュラムの基準と深い調整 (deep alignment)

イングリッシュによれば、理論的問題でもっとも重要なことは、カリキュラムが持てるものと持たざるものを分ける手段であり続けてはならないということである²³⁾。

イングリッシュによれば、多数の生徒を対象にしたテストが米国を覆っている。改善はテストの成績を上

げることであると思われる。ドリル学習が、学力を高めるといふ誘惑が圧倒的である²⁴⁾。

イングリッシュは、全ての子どもたちが学習しうるし成功しうるという状況を作り出すためにカリキュラムの調整という概念を提案する。カリキュラムの調整とは、書かれたカリキュラム、教えられるカリキュラム、テストされるカリキュラムの3つを合致させるこ

とである。このような調整は、書かれたカリキュラムが学習される蓋然性を高めるとイングリッシュは述べている²⁵⁾。

カリキュラムの調整には2種類ある。

表2は、それらの2種類の調整を表している²⁶⁾。イングリッシュによれば、カリキュラムの調整には表3のような4つの側面がある²⁷⁾。

表2 カリキュラムの2種類の調整

	内容の調整	内容の調整
カリキュラムデザインの調整	テストとカリキュラムの内容の合致	テストの形式とカリキュラムの形式の合致
カリキュラムの運用の調整	カリキュラムの内容を書かれたカリキュラムと同じように教える	教師が教えることの中にはテストの形式も含まれる

表3 カリキュラムの調整の4つの側面

	カリキュラムのデザイン	カリキュラムの運用
フロントローディング	最初にカリキュラムを書き、次に、それを評価するテストを作成する	最初にカリキュラムを教え、それを紙に移し、それを評価するテストを作成する
バックローディング	公表されたテスト問題を入手し、それをもとにカリキュラムを作成する	公表されたテスト問題を入手し、その内容と文脈を含んだ平行する教室の構造を作る。

このようなカリキュラム調整は結局テストのための教育ではないか、という批判が予想される。このような批判は半分正しいとイングリッシュは述べている²⁸⁾。残り半分の、調整の意義について、イングリッシュは次のように述べている。

もし、テストの目的が、診断なら、そして、賞と罰を目的としないなら、テストのための授業をする必要は無い。他方、テストが、説明責任の目的のために、生徒の学習の広がりやを決定することにあるなら、それは、カリキュラムに合致すべきである。そうでなければ、説明責任は無意味である。そして、ここで述べたような調整をしなければ、ほとんどのテストは、子どもたちの社会的経済的地位を反映するだけだろう²⁹⁾。

カリキュラム調整によって、どの学校も書かれたカリキュラムと同じ内容が、テストの形式と同じやり方を含んで教えられると述べているのである。このことは、教えられているカリキュラムの監査を必然的に必要としている。もちろん、各学校は、テスト以外のことを教えてよい。テストは、学習の一部を測定するに過ぎない³⁰⁾。

4 教師の力量形成とカリキュラム・リーダーシップの問題

以上のイングリッシュのカリキュラム経営論にもとづいて、教師の力量形成とカリキュラム・リーダーシップの問題を検討してみたい。

(1) 科学的教育行政学対解釈学的教育行政学の問題

ギデンス (Anthony Giddens) が述べているように、自然科学も社会科学もある意味で、解釈学の仕事である。社会科学の対象である社会現象は、人間の意味によって構築されているから、この意味では、社会科学は2重の解釈学にしたがう³¹⁾。

このことは、実証研究も解釈に支えられていることを示している。このことを認めれば、実証研究を拒む必要はないように提案者には思える。実証的データに基づいた理論も解釈に支えられたひとつの文脈的知識と考えれば、それは学問的ディスコースの一部ではないだろうか。

(2) カリキュラムへの経営学的アプローチの意味

カリキュラムとは、「教師のために計画された仕事の計画」であるという定義は、教育内容の選択と配列、あるいは、教育的経験の選択と組織化といった概念を見慣れた筆者には新鮮であった。カリキュラム経営とは、カリキュラム開発とカリキュラムの運用の両方を含んでおり、カリキュラム開発は経営機能の一部であるというイングリッシュの立場を提案者は支持する。

(3) カリキュラムの品質管理の問題

イングリッシュのカリキュラム経営論は、カリキュラムの品質管理で特徴づけられる。テストと競争による学力向上の声に覆われている折、競争ではなく、協力によって学力を向上させようとしていること、カリキュラムを階級間格差の道具とならないようにしようとするイングリッシュの視点は貴重である。しかし、カリキュラムの調整とカリキュラムの監査だけで、学業成績に子どもたちの社会経済的地位を反映しないようにすることには限界があるように筆者には思える。

(4) カリキュラム・リーダーシップの問題

ブラドレイ (Leo H. Bradley) は、カリキュラム・リーダーシップという概念は、カリキュラム・リーダーという役割をあてがわれた地位として使われる場合と、管理者もしくは教師の義務の一部としてカリキュラム・リーダーシップが求められる場合、の二つのシナリオで使われると述べている³²⁾

カリキュラム・リーダーとしての校長という場合は前者である。イングリッシュが、教室の教師もカリキュラム経営の統合的パートナーという場合、教室の教師も応分のカリキュラム・リーダーシップを求められることになる。このような使い方の場合は、後者である。

米国の教育経営学 (教育行政学) において、科学的教育行政学と解釈学的教育行政学・ポストモダン教育行政学の対立があるように、カリキュラム研究の世界においても、タイラー原理を中心とする伝統的なカリキュラム構成の研究者たちとタイラー原理を批判する再概念主義者、ポストモダニストの対立がある。前者はカリキュラムの構成、立案に向かい、後者は、カリキュラムの理解や批判に向かう。

筆者は、カリキュラムの理解や批判も大切であるが、カリキュラムは究極的には、立案、構成されなければならないと考える。筆者のカリキュラムの定義は「学校教育計画」である。カリキュラムの立案において求められるリーダーシップは、「教育的タクト」で

あると提案者は考える。なぜ、教育的タクトが必要であるかという、それは、目の前に子どもがいるからである。教育は子どもたちと社会、人類の未来に責任を持って行われる。その意味で、カリキュラム経営のリーダーシップは、デミングが述べているように、予測である。子どもたちは大人を見て育つ。その意味で、全ての大人は子どもに対して教育的影響力を持っている。しかし、全ての大人が子どもたちに教育的責任を持って行動しているわけではない。大人たちの行動に意味を与えるのは教育的責任を持った親と教師である。カリキュラムは、イングリッシュが言うようにその「教師のために計画された仕事の計画」である。それは、組織体としての学校の教育活動を方向付ける。

ヘルムホルツ (Hermann Helmholtz) は、社会科学者は、テキストや社会現象の意味に関わって生み出すことのできる洞察によって、自分のタクトの尺度を示す、と述べている³³⁾。

子どもたちと社会の未来に責任を持つとするものは、時代認識、社会認識、子ども認識、予測によって、自分のタクトを示す。そのタクトこそ、カリキュラム・リーダーシップではないだろうか。

(5) 教師の力量形成の問題

教育的タクトという概念は、もともと、ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart) が、1802年に、教育に関する最初の講演の中で「ある教師がよい教師であるか、悪い教師であるかに関する本当の問題は、単に次のことである。—この人物はタクトの感覚をもっているか?」と述べたことに始まる。イングリッシュが述べているように、もし、教師が、カリキュラム経営の統合的パートナーであるなら、教師は、子どもたちの前における「即興の判断とすばやい行動」としてのタクトだけではなく、カリキュラムに関わる教育的タクトをその力量の中に求められている。

【引用文献】

- (1) イングリッシュのカリキュラム経営論に関する先行研究には次のものがある。

倉本哲男「アメリカのカリキュラムマネジメントに関する研究—F.Englishのマネジメントサイクル論を中心に—」『日本教育経営学会紀要』第45号 2003年 63-77ページ

この論文では、イングリッシュのカリキュラム経営評価論を中心に、カリキュラムのマネジメントサイクル論を整理している。

- (2) 教育行政学, 教育経営学の分野においてこの対立を扱った研究にはたとえば次のものがある。
河野和清「アメリカ教育経営学における現象学的アプローチ」『日本教育経営学会紀要』第30号 1988年
川島啓二「現代アメリカ教育行政学の方法論争— T.B.グリーンフィールドの“挑戦” —」『教育行財政研究』第15号 関西教育行政学会 1988年
川島啓二「現代アメリカ教育行政学における『批判的理論』」『京都大学教育学部紀要』第36号 1990年
曾余田浩史「アメリカ経営学における『理論論争』の再検討—学校の信頼の喪失と関連して—」『日本教育経営学会紀要』第33号 1991年
- (3) Jack A. Culbertson, A Century's Quest for a Knowledge Base, in Norman J. Boyan ed., Handbook of Research on Educational Administration, Longman, 1988, p.22.
- (4) Thomas Greenfield and Peter Ribbins ed., Greenfield on Educational Administration, Routledge, 1993, p. 7.
- (5) Fenwick W. English, Educational Administration -The Human Science, Harper Collins, 1992, p.ix.
- (6) Ibid, pp.51-63.
- (7) Fenwick W. English, Theory in Educational Administration, Harper Collins, 1994, pp. 2-23.
- (8) Ibid, p.231.
- (9) Fenwick W. English, The Postmodern Challenge to The Theory and Practice of Educational Administration, Charles C. Thomas, 2003, pp. 3-6.
- (10) Ibid, pp.12-21.
- (11) Ibid, p.125.
- (12) Robert Donmoyer, The Continuing Quest for a Knowledge Base:1976-1998, in Joseph Murphy and Karen S. Louis ed., Handbook of Research on Educational Administration, Jossey-Bass, 1999, pp.25-43.
- (13) Fenwick W. English, The Postmodern Challenge to The Theory and Practice of Educational Administration, op.cited, p.10.
- (14) Fenwick W. English, Curriculum Management for Schools, Colleges, Business, Charles C. Thomas, 1987, p.44.
- (15) Ibid.
- (16) Fenwick W. English, Quality Control in Curriculum Development, The American Association of School Administrators, 1978, p. 4, pp.26-47.
- (17) Fenwick W. English et al ed., Curriculum Management Audit, Technomic Pub., 1995, p. 3.
- (18) Fenwick W. English, Curriculum Auditing, Technomic Pub., 1988, pp.34-69.
Auditingは, EvaluationやAssessmentと区別するためにここでは「監査」と訳した。
- (19) W. Edwards Deming, The New Economics for Industry, Government, Education, Massachusetts Institute of Technology, 1993.
- (20) Fenwick W. English, Total Quality Education, Corwin Press, 1994, pp.20-35.
- (21) Ibid, pp.65-67.
- (22) Ibid, pp.67-71.
- (23) Fenwick W. English with Betty E. Steffy, Curriculum and Assessment for World Class School, The Scarecrow Press, 2001, p.xi.
- (24) Fenwick W. English with Betty E. Steffy, Deep Curriculum Alignment, The Scarecrow Press, 2001, p.x.
- (25) Ibid, pp.14-18.
- (26) Curriculum and Assessment for World-Class Schools, op.cited, p.12.
- (27) Deep Curriculum Alignment, op.cited, p.58
- (28) Ibid, p.vi.
- (29) Curriculum and Assessment for World-Class Schools, op.cited, p.5. p.10.
- (30) Ibid, pp.70-71.
- (31) Anthony Giddens, New Rules of Sociological Method, Stanford University Press, 1993, pp.168-170.
- (32) Leo H. Bradley, Curriculum Leadership-Beyond Boilerplate Standards-, Scarecrow Education, 2004, p.vii.
- (33) van Manen, Max, Reflection and Pedagogical Moment: the normativity of pedagogical thinking and acting, Journal of Curriculum Studies, vol.23, no. 6, 1991, pp.523-525.にもとづく。

本稿は, 日本カリキュラム学会第15回大会課題研究 I 「カリキュラム経営と教師の力量形成」(2004年7月3日 於愛知教育大学)の提案に若干の修正を加えたものである。